

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：33941

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2021

課題番号：15K15872

研究課題名（和文）小児看護の専門性を活かしたプレパレーションと診療報酬

研究課題名（英文）Preparation utilizing pediatric nursing specialty and medical fee

研究代表者

神道 那実（Nami, Jindo）

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師

研究者番号：90434638

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、全国的なプレパレーション実施状況と関連要因を明らかにすることを目的とした。全国の小児科を標榜する病床数400床以上の一般病院と小児専門病院の小児病棟・小児科外来に勤務する看護師1,712人を対象とし、無記名自記式質問紙調査を行った。有効回答数は741（有効回答率43.3%）であった。その結果、プレパレーションの必要性の認識や学習経験、実施経験、実施に用いた物・費用、5段階の実施状況、プレパレーション実施への影響要因、診療報酬に算定してほしいと考えているケアなどが明らかになった。調査結果の分析に基づき、今後のプレパレーションにおける課題と対策を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、子どもの権利やプレパレーションが広く周知されるようになった現代におけるプレパレーションの実施状況とその影響要因を客観的データとして明らかにすることができた。これにより、プレパレーション実施における課題と対策を考えることができたため、今後の小児看護におけるプレパレーションの質向上に貢献できると考える。また、プレパレーションの診療報酬算定を検討するうえでの基礎資料になると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to determine the status of preparation implementation across Japan and clarify its relationship. A survey using an anonymous, self-administered questionnaire was conducted. Participants included 1,712 nurses who worked in pediatric wards and pediatric outpatient clinics in both nationwide pediatric hospitals as well as general hospitals with a pediatrics department and at least 400 beds. A total of 741 valid responses were collected (valid response rate: 43.8%).

The preparation related data emerged from the questionnaire results are awareness of need, learning experience, implementation experience, the five levels of implementation status, used media of implementation, cost, factors affecting implementation, and nursing care that nurses expect to be accepted as medical fees. Based on the analysis of these findings, we investigated challenges and future measures.

研究分野：小児看護

キーワード：小児看護 プレパレーション 診療報酬

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1994年に子どもの権利条約が批准されて以降、小児看護においても、子どもの権利を尊重した援助が重要視されるようになった。そして、処置や援助を実施する際には、子どもの不安や恐怖を軽減したり、子どもが持っている力を引き出すために、発達段階や個性を考慮したプレパレーションが様々な施設で実施されている。

小児看護学研究においては、2007年頃よりプレパレーションをテーマにした研究が増加した。子どもの手術や点滴・採血・腰椎穿刺・骨髄穿刺・レントゲンといった検査・処置、服薬・含嗽などの療養生活に必要な行動について、パンフレットや紙芝居、人形などを用いたプレパレーションが実施され、その効果について多くの報告がされている。一方、2007年の調査では、小児総合医療施設26施設において患者1人当たりの総看護業務時間数の平均は、1日の総計時間が1,164.9分であり、成人病棟の6.5倍にあたりと報告されており¹⁾、小児看護に携わる看護師は多忙な業務の中でプレパレーションに多くの時間を費やしている状況が推測できる。

小児看護における診療報酬に関する研究では、病院経営や認定看護師の活動に関するもの、加算がとれる新生児や在宅ケアに関するものが多く、療養生活における看護援助と診療報酬との関連で報告されたものは散見されない。

小児看護におけるプレパレーションには、様々な発達段階にある子どもを理解するための専門的知識や子どもの個性に応じた説明・関わりをするための技術が必要である。多くの看護師が小児看護の専門性を活かしたプレパレーションに取り組んでいるが、現在の診療報酬で算定する項目はなく、実施に要する時間や経費等が評価されていない現状がある。そのため、小児看護におけるプレパレーションが診療報酬に算定されることを目指し、プレパレーションの実施状況を客観的データとして明らかにすることが必要と考えた。

2. 研究の目的

全国の小児科を標榜する総合病院の小児病棟及び小児科外来に勤務する看護師を対象とし、プレパレーションの実施状況と実施に影響する要因を明らかにする。また、小児看護に携わる看護師の診療報酬に対する認識を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

全国の小児科を標榜する総合病院2,642施設のうち、病床数400床以上の施設と小児専門病院の小児病棟および小児科外来に勤務する看護師を対象とした。

(2) 調査方法

無記名自記式質問紙調査を行った。

(3) 調査内容

調査項目は、属性：年代、性別、最終学歴、勤務場所、看護師経験年数、病棟および小児科外来での小児看護経験年数、プレパレーションの実施状況：過去の実施経験、最近3か月以内の実施経験、プレパレーションの対象・内容・使用物品・協力者、プレパレーション5段階の実施状況、プレパレーションの実施状況に関連する内容：必要性の認識、勉強会参加と自己学習を含めた学習経験、診療報酬に反映してほしい看護技術、などである。プレパレーションの定義については、「入院・治療・検査などによって引き起こされる子どもの不安や恐怖に対し、認知発達に応じた説明や配慮をすることで子どもの対処能力を引き出すこと」と明示した。プレパレーション5段階は、先行研究²⁾³⁾を参考にして、第1段階：病院に来る前、第2段階：アセスメント、第3段階：プレパレーションの実施、第4段階：ディストラクション(気晴らし等)、第5段階：検査・処置・手術後の介入からなる計20項目で構成した。回答は、「よくする」「時々する」「あまりしない」「まったくしない」の4段階とした。

質問紙調査を実施する前に、小児看護に携わる看護師を対象にプレテストを行い、分かりにくい質問や回答しにくい質問がないかを確認した。

(4) 分析方法

分析はSPSS(IBM SPSS Statistics 28 for Windows)を使用し、以下の手順で行った。なお、自由記載で回答を求めた診療報酬に反映してほしい看護技術については、類似性に沿って整理した。

対象者の属性、プレパレーションの実施状況および実施状況に関連する内容について、記述統計を行った。

プレパレーションの過去の実施経験(以下、過去の実施経験とする)と対象者の属性、必要性の認識、学習経験との関連について、Pearsonの²検定・Fisherの正確確率検定および残差分析を行った。

過去の実施経験と0.1%有意水準で有意差が認められた学習経験に着目し、学習経験と属性、必要性の認識との関連について、Pearsonの²検定・Fisherの正確確率検定および残差分析を行った。

更に、プレパレーション5段階の過去の実施状況（以下、5段階実施状況とする）との関連を検討するため、過去の実施経験と有意差がみられた勤務場所（混合病棟・小児病棟）病棟での小児看護経験年数、学習経験の3項目について、Pearsonの²検定・Fisherの正確率検定および残差分析を行った。小児看護経験年数については、Benner(2001/2005)の看護理論⁴⁾で「一人前レベル」とされる3年以上と3年未満に分けて分析した。

なお、分析は無回答を除いて行い、最終学歴は大学院修士課程が16人と少数であったことから、大学・大学院を同じ群とした。必要性の認識は、必要だと「思う」「少し思う」を「必要あり」群、「あまり思わない」「まったく思わない」を「必要なし」群とし、5段階の実施状況は「よくする」「時々する」を「実施する」群、「あまりしない」「まったくしない」を「実施しない」群とした。

(5) 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する機関の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。また、必要に応じて、対象施設の倫理審査委員会の承認を得た。

4. 研究成果

全国の小児科を標榜する総合病院のうち、病床数400床以上の547施設と小児専門病院14施設に研究依頼文を送付し、同意が得られた117施設に調査票1,712部を送付した。

調査票の回収数は763部（回収率44.6%）であり、そのうち741部を有効回答とした（有効回答率43.3%）。

(1) 対象者の属性（表1）

対象者は、20歳代が252人(34.0%)と最も多く、性別は女性706人(95.3%)、男性25人(0.5%)であった。最終学歴は専門学校が486人(65.6%)で最多であった。勤務場所は小児病棟439人(59.2%)、混合病棟218人(29.4%)、小児科外来80人(10.8%)であり、小児病棟が最も多かった。看護師経験年数は平均13.7±9.8年、病棟での小児看護経験は3年未満が232人(34.1%)と最も多く、次いで5~10年未満178人(26.2%)で、平均6.0±5.4年であった。外来での小児看護経験は3年未満が90人(46.2%)と最も多く、平均4.1±3.8年であった。

(2) プレパレーションの必要性の認識と学習経験

プレパレーションの必要性を認識している人は730人(99.6%)であり、学習経験がある人は736人中610人(82.9%)であったことから、多くの看護師が必要性を認識し、学習経験を有していることが明らかになった。

(3) プレパレーションの実施経験

過去の実施経験がある人は741人中596人(80.4%)であったが、最近3か月以内の実施経験がある人は、347人(46.8%)と半数に満たないことが明らかになった。また、プレパレーションの過去の実施経験には、勤務場所、病棟での小児看護経験年数、学習経験が影響していることが明らかになった。

(4) プレパレーションの対象・使用物品・費用・協力者

過去に実施したプレパレーションにおいて、実施対象は幼児後期が最も多かった。使用物品は既存の玩具が最も多く、次いでぬいぐるみ・パンフレット・実際の医療器具が多かった。プレパレーションに要した費用の出処は、病棟備品費が多かった(71.2%)が、個人負担をしている人もいた(14.6%)。また、プレパレーションに他職種の協力を得たことがある人は591人中148人(25.0%)であり、7割以上の看護師が他職種の協力を得ることなく実施していることが明らかになった。協力を得た専門職種として最も多かったのは保育士であり(46.0%)、その他に医師や小児看護専門看護師、チャイルドライフスペシャリストなどが挙げられた。

(5) プレパレーション5段階の実施状況と関連要因

5段階実施状況(図1)では、第1段階：情報収集と第2段階：アセスメントの項目において、「よくする」「時々する」と回答した人が少なかった。「よくする」「時々する」と回答した人が

表1 対象者の属性

	属性	人数	%
年齢 ^a	20歳代	252	34.0
	30歳代	210	28.3
	40歳代	177	23.9
	50歳以上	98	13.2
	無回答	4	0.5
	無回答	10	1.3
最終学歴 ^a	専門学校	486	65.6
	短期大学	70	9.4
	大学・大学院	175	23.7
	無回答	7	0.9
勤務場所 ^a	小児病棟	439	59.2
	混合病棟	218	29.4
	小児科外来	80	10.8
	無回答	4	0.5
看護師経験年数 ^a	3年未満	116	15.7
	3~5年未満	80	10.8
	5~10年未満	122	16.5
	10~20年未満	221	29.8
	20年以上	194	26.2
	無回答	8	1.1
病棟での小児看護経験年数 ^b	3年未満	232	34.1
	3~5年未満	148	21.8
	5~10年未満	178	26.2
	10~20年未満	101	14.9
外来での小児看護経験年数 ^c	20年以上	21	3.1
	3年未満	90	46.2
	3~5年未満	42	21.5
	5~10年未満	45	23.1
	10年以上	18	9.2

a: n = 741

b: n = 680, 病棟での勤務経験がない人および無回答の人を除く

c: n = 195, 小児科外来での勤務経験がない人および無回答の人を除く

80%未満と特に少なかったのは、第1段階の「入院前に親が子どもに行った説明について情報を得る(59.0%)」、「外来で医師・看護師が子どもに行った説明について情報を得る(59.7%)」、第5段階の「一緒に遊ぶ機会をもつ(73.3%)」の3項目であった。

また、5段階の各項目の実施状況と勤務場所・病棟での小児看護経験年数・学習経験との関連性を分析したところ、次のような結果が得られた。

勤務場所との関連では、3項目で有意差がみられた。第1段階「入院前に親が子どもに行った説明について情報を得る」、第2段階「子どもの入院・検査・処置等への思いを聴く」の2項目では、混合病棟に比べて小児病棟に有意に実施する人が多かった($p < 0.01$)。第5段階「シールなどのご褒美を渡し、頑張りを認める」は、小児病棟に比べて混合病棟に有意に実施する人が多い結果であった($p < 0.01$)。

病棟での小児看護経験年数との関連では、2項目で有意差がみられた。病棟での小児看護経験が3年以上の人は、第1段階「入院前に親が子どもに行った説明について情報を得る」の実施が有意に多かった($p < 0.01$)。一方、第2段階の「子どもの興味や認知発達に応じたツールを考える」は、3年未満に有意に実施する人が多く、3年以上で少なかった($p < 0.05$)。

学習経験との関連では、2項目で有意差がみられた。学習経験がある人は、第2段階「子どもの興味や認知発達に応じたツールを考える」、「子どもの性格や認知発達に適したプレパレーション時期を考える」の実施が、学習経験がない人に比べて有意に多かった($p < 0.05$)。

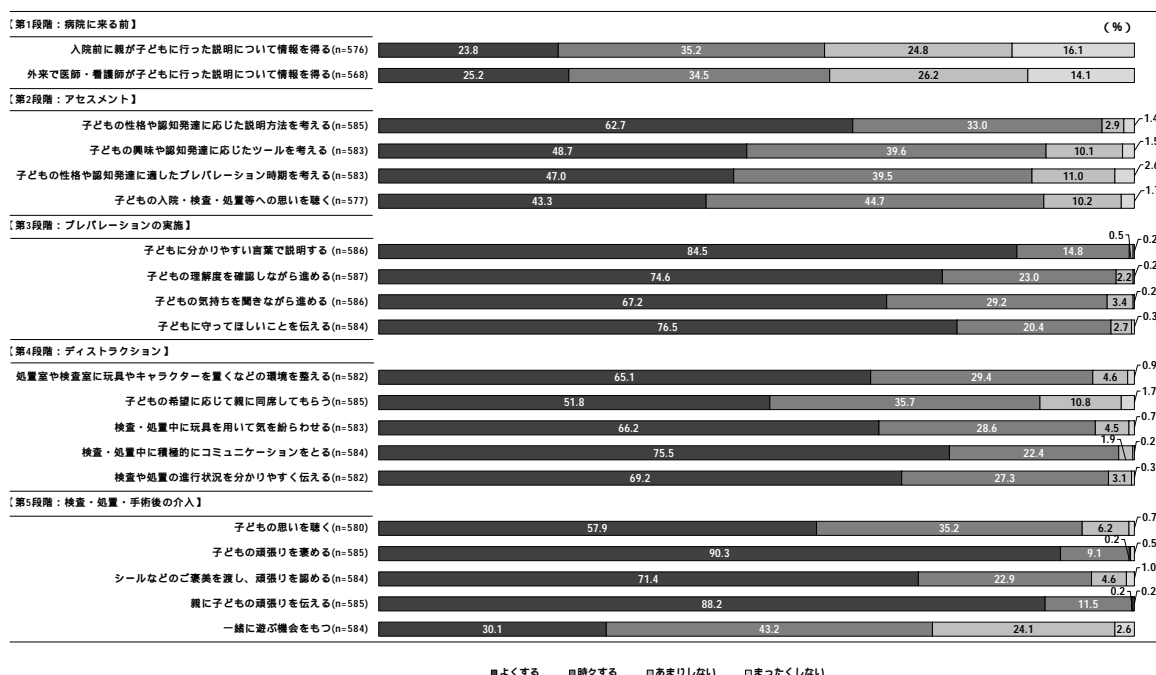


図1 プレパレーション5段階の実施状況

(6) 診療報酬に反映してほしいと考えている看護技術

小児看護に携わる看護師が診療報酬に反映してほしいと考えている看護技術として、87件の自由記載があった。その内容は、手術前後の説明や個人別のパンフレット作成などの「指導・プレパレーション」、遊びや学習・付添いのない児の保育などの「小児特有の日常生活援助」、多職種カンファレンスや他職種との連絡調整などの「医療チーム内での役割」の他、「検査・処置・治療」に関する内容や日々行っている「看護ケア」が挙げられた。

(7) 本研究の成果

本研究の結果から、プレパレーションの全国的な現状について客観的データが得られた。また、プレパレーションの実施における今後の課題として、日常的な看護として定着させること、子どもを理解するための事前の情報収集やアセスメントを充実させること、検査・処置・手術後の介入として遊びを取り入れることが必要であると考えられた。さらに、プレパレーションの定着と充実を図るためには、必要性の認識や学習経験を増やすだけでは難しいことも分かり、多忙な業務の中でプレパレーションを日常的な看護として定着し充実させていくための対策を検討することにもつながった。

研究成果のうち、プレパレーションの実施状況(実施経験・5段階実施状況)と関連要因については、現在学会誌に論文投稿中である。その他の研究成果についても、今後論文を作成していく予定である。

文献

- 1) 伊藤龍子(2007)．小児患者に要する看護時間と適正人員配置に関する研究．小児保健研究．66(6)，797-802．
- 2) 田中恭子(2008)．プレパレーションの5段階について．小児看護，31(5)，542-547．
- 3) 北野景子,内海みよ子,和田聖子,宮井信行(2012)．プレパレーションの5段階における看護師の認識と実践の現状．日本小児看護学会誌．21(3)，44-51．
- 4) Benner，P(2001) /井部俊子訳(2005)．ベナー看護論 新訳版 - 初心者から達人へ - ．医学書院．

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 神道那実
2. 発表標題 プレパレーションの学習経験・実施経験と看護師の属性との関連
3. 学会等名 日本小児看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神道那実
2. 発表標題 小児看護の専門性を活かしたプレパレーションに必要な資源と診療報酬に反映してほしい看護技術
3. 学会等名 日本小児看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神道那実
2. 発表標題 小児看護におけるプレパレーション5段階の実施状況と学習経験との関連
3. 学会等名 日本赤十字看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大西 文子 (Onishi Fumiko) (00121434)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡田 摩理 (Okada Mari) (20745583)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・准教授 (33941)	
研究分担者	遠藤 幸子 (Endo Sachiko) (00817174)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・助教 (33941)	
研究分担者	鳥居 賀乃子 (Torii Kanoko) (20743420)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・助手 (33941)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関